

モンゴル政府・核廃棄物受入拒否を決定！

～ 日本も加わった秘密交渉を市民運動が止めた！ ～

日本政府とアメリカがモンゴルに対して核技術を提供する見返りに核廃棄物を押し付けようとする交渉を秘密裏に進めていることを以前に紹介した。この事実を知ったモンゴル国民の中に大きな反対運動が起き、モンゴル政府はこの秘密計画を撤回せざるを得ない事態に追い込まれ、ついに計画を断念したことを関係国に伝えた。

～ 以下、ニュースより～

【**核処分場：モンゴル政府、計画を断念 反対高まり、日本に伝達**】

モンゴル政府は、日米両国とともに進めてきたモンゴルに原子力発電所の使用済み核燃料の一時保管・処分場を建設する計画を断念することを決め、9月下旬に日本政府など関係者に伝えたことが14日、わかった。モンゴル国内で反対運動が高まり、計画継続は不可能と判断したとみられる。同様の計画は、02年にオーストラリアでも世論の反発で失敗に終わっており、改めて国際的な処分場建設の難しさが浮き彫りになった。

計画は昨年9月、米エネルギー省のポネマン副長官がモンゴルを訪問したのを機に交渉がスタート。日本の経済産業省も参加し今年2月、ワシントンで初の3カ国協議を実施した。また、モンゴルからの核燃料調達を目指すアラブ首長国連邦(UAE)も加わり、7月初旬には、ポネマン副長官が、海江田万里経産相(当時)宛てに、政府間覚書(MOU)案を送付し年内締結を目指していた。

3カ国の秘密交渉は、毎日新聞が5月に報道したが、モンゴル政府は公式には交渉の存在自体を否定してきた。報道後、モンゴル国内で市民が反発を強め、計画撤回と情報公開を求めてきた。

これらの状況を受け、モンゴルのエルベグドルジ大統領は9月21日の国連総会演説で「モンゴルに核廃棄物処分場を建設することは絶対に受け入れられない」と表明、ウィーン国連代表部のエンクサイハン大使も国際原子力機関(IAEA)総会で「他国の核廃棄物を受け入れる考えも処分場を建設する考えもない」と演説した。

～ 中略 ～

IAEAの調査によると、モンゴルは推定140万トンの豊富なウラン資源がある。モンゴル政府は、ウラン資源を有効に活用するため、ウランを核燃料に加工し海外に輸出する案を検討、その際、使用済み核燃料を供給先から引き取る「核燃料リース契約」を導入する考えを模索していた。米エネルギー省は、その構想を進展させ、各国の使用済み核燃料をモンゴルに集め一時貯蔵・最終処分する案を提示、日本政府とともに交渉を進めていた。

毎日新聞 2011年10月15日 東京朝刊

野田首相が国際会議で宣言した「原発の海外輸出」政策の中には、当然、モンゴルへの核技術提供とセットで核廃棄物押し付けも織り込まれていたはずだが、頓挫した形だ。自国の放射能対策すらできない国が、外貨獲得のために原発を積極的に海外に売り込もうという姿勢自体が、倫理を問われる恥ずべき行為であることは明らかだ。「ドジョウのように泥臭く」と低姿勢を見せてスタートした野田内閣だが、「泥臭く」の中味は倫理観のかけらも見られない「放射能汚泥」の臭いがぶんぶんする。日本はベトナム他複数の国と原発関連技術の技術提携を今もって進めている。3月31日には原発輸出政策法案が賛成票:230 反対票:11で参議院を通過した。原発事故のどさくさにまぎれてこんな恥ずべき法案を通過させる国会とは一体なんだろう？ しかも圧倒的賛成多数での可決だ。原子力村に牛耳られたマスコミが大きく取り上げることを避けたため、多くの国民は知らない内に国会を通過していた。これも壮大な「ヤラセ」の一種といつてよい。

8月5日には、「原発の安全確保は一義的には各国の責任」とし、「諸外国が我が国の原子力技術を活用したいと希望する場合には、我が国としては、相手国の意向を踏まえつつ、世界最高水準の安全性を有するものを提供していくべきであると考える」として、引き続き原発輸出を継続する方針を閣議決定している。一方でアメリカと手を組んで途上国の一部政府関係者と秘密裏に事をすずめ、あたかも「我が国の原子力技術を活用したいと希望した」ように見せかけて、原発と核廃棄物を輸出するのだという。果てしないこの「ヤラセ構造の連鎖」を日本の国民は止めることができるのか。

モンゴル国民と日本国民のちがいはどこからくるのだろうか。かつて世界に冠たるモンゴル帝国を築き上げたチンギスハーンの末裔たちが、「俺たちをなめんなよ」とばかりに核廃棄物の押し付けを明確に拒否した姿勢に、民族としてのプライドの高さを感じる。広大な平原を駆け抜け遊牧の民としてチベット仏教を精神的な支柱にした誇り高き民族。

日本の仏教関係者や神道関係者の方々はどうしているのだろうか？お布施やさい銭を稼ぐことに埋没していいわけがない。宗教法人非課税措置の手のひらの上で涅槃を決め込むとしたら、お釈迦様も嘆くにちがいない。天照大神も岩戸の向こう側にお隠れになるというものだ。このままでは世は放射能の暗闇につつまれてしまう。岩戸に引きこもった天照大神を引きずり出したのは八百万の神様のバカ騒ぎだった。現代版ササノオノミコト(凶暴な神)である「原子力」を鎮めるために、八百万の人間のバカ騒ぎが今必要ときだ。傍観している場合ではない。

理科室で放射能測定器が振り切れる！

～ 古いクルックス管から高線量のX線が漏えい！ ～

中学校2年生の理科で電流の正体を確かめる方法として、クルックス管(真空管)を用いて陰極線を見せる実験がある。ちょうど2年生の授業で該当箇所差し掛かったため、実験して見せた。実験しながらふとあることを思い出す。「陰極線のビームがガラス面にぶつかりX線を照射する・・・」。知識として知ってはいたが、特に確かめることもなく今日までできていたが、福島第1原発事故の放射能漏れで、放射線に対する関心が高まっていることもあって、理科室の棚の奥の古い放射能測定器を持ちだして測って見た。

普段は自然放射線に反応して10秒に1回程度反応するだけの測定器。資料としてついている放射性物質(ガラスに封入されたもの)でも、10秒に20カウント程度した針が振れたことがない。原発事故後、校舎外の線量が高そうな場所も測定したが、自然放射線とほとんどかわらない。要するに、この測定器で針が大きくふれるところなど今まで一度も見たことがなかった。

さて、誘導コイルにクルックス管を接続しよいよ放射能測定器を近づける。なななんと、針が完全に振り切れてしまった！間違いかと思ってやりなおしたが結果は同じだった。古いタイプの測定器なので単位はcpm(カウント・パー・ミニット)とmR(ミリレム)で出てくる。針は測定限界の6000cpmをはるかにふりきれた状態。仮に6000cpmだとすると、人体への影響評価数値Svの単位に換算してみると120cpm⇒1μSvなので、6000cpm⇒50μSv/hとなる。検出上限をはるかに超えていることを考えると100μSv/hに達していても不思議ではない。

胸部X線検査が1回で約50μSv/hであることを考えると、理科室で何の防御もなしやる実験ではない！

この数値は「理科室が病院のレントゲン室と同じ環境」になることを意味する。しかもレントゲンは1回の照射時間が極めて短い、実験では数十倍の時間は見せている計算になる。しばらくショック状態に陥る・・・。

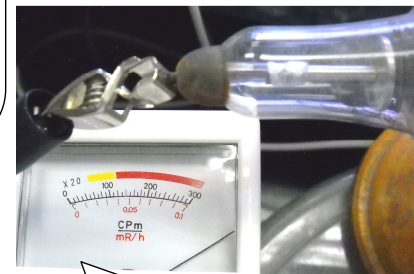
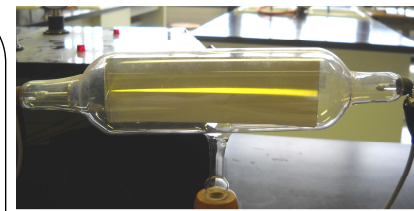
計画的避難区域となっている福島・飯館村では10月12日、2.1μSv/hが記録されている。年間では18.4mSvに相当し、一般住民の18倍だ。もし理科室で陰極線実験を1年間連続でやり続けると概算で876mSvになる可能性がある。これはほぼ致死量に相当する数値だ。実際には2～3分程度の実験で終了するのでここまでの事態になることはあり得ないが、要注意であることに変わりはない。X線の漏えいがひどいクルックス管は使用すべきではないことを改めて実感することになった。しかし、破損でもしない限り交換することはないのが現状だ。教材としての安全基準はどうなっているのだろうか？調べて見ると、

【中学・高校理科 観察・実験における安全の手引き】には以下のような記述がある。

- **クルックス管(電子が陽極の金属に衝突する)**
 - ・X線が発生していることに注意して取り扱う。
 - ・長時間放電させない。
 - ・強度は距離の2乗に反比例するので離れて観察する。
 - ・**実験者は、X線防護眼鏡や防護衣類を使用するのが望ましい。**
 - ・放射線遮蔽用ガラスを用いて囲むとよい。
- **その他**
 - ・電子線をターゲットで制動を掛ける構造のものからはX線が発生している可能性があるので注意を要する。
 - ・念のために**X線防護眼鏡やX線防護衣類を身に付けておくとうい。**

確かに注意事項として説明されている。しかし、X線防護眼鏡や放射線防護衣類を身につけて実験している理科教員など現実にはいないだろう。自慢にもならないが、私はしたことなどない。それ以前の問題として、理科教員養成課程の中でこうした実験基礎を学ぶ機会もほとんどない。

現時点での私の結論は、「**中学校の理科室や実験ではない**」ということにつきる。生徒や実験者の安全を考えれば、放射線防護設備のある大学ですべき実験だ。教科書や指導書にはこうした取り扱い上の危険性はどこにも書いていない。理科教育関係者の方は、直ちに自校のクルックス管を確認することをお勧めする。



目盛りは300まで刻んであり、その×20倍がCpm値となる。写真のように数値の針は完全に振り切れた状態。背筋が寒くなりました！